

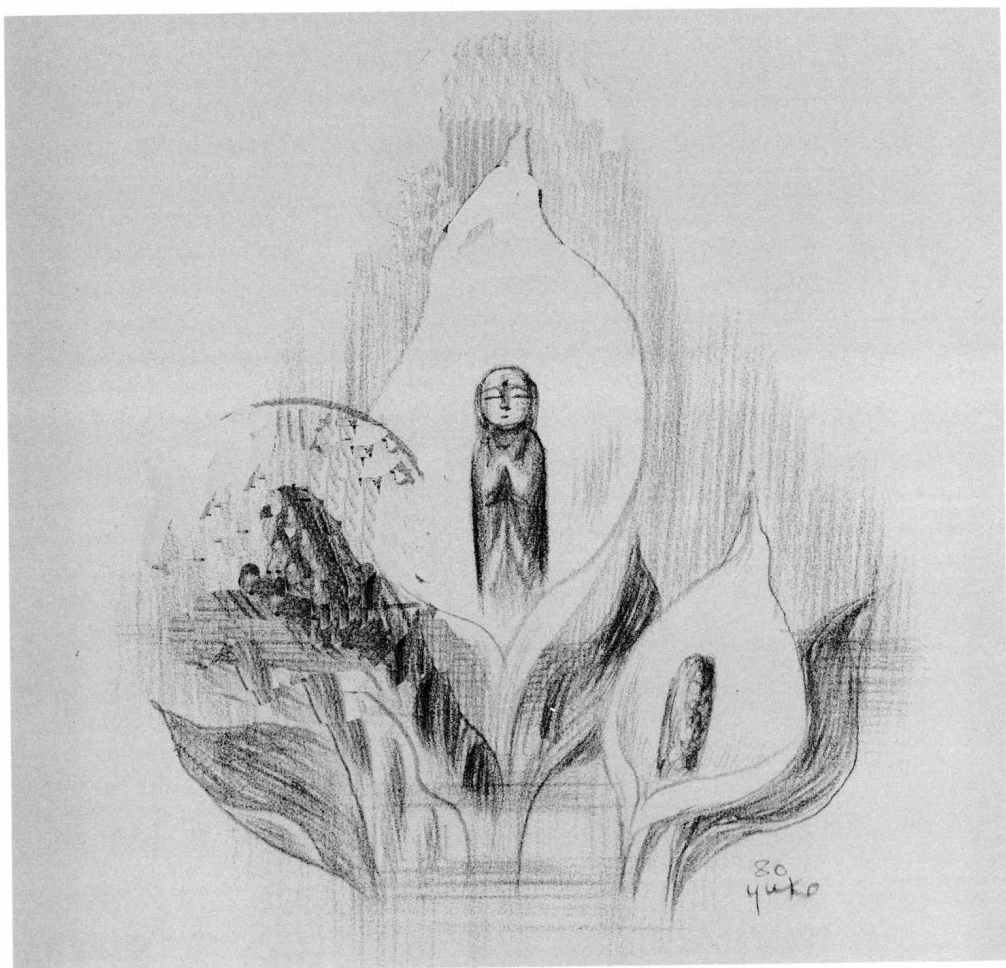
土曜日のサーカス

新 冬二・作 瀬戸好子・画



ぼくのとんちんかん

飯田栄彦・作 金沢佑光・絵



913

土曜日のサーカス

新 冬二 作 瀬戸好子 画

東京 小学館 昭和60 (1985)

114 P 22cm

小学館の創作児童文学〈中学年版 17〉

土曜日のサーカス

一九八五年四月五日

定価・七八〇円

初版第一刷発行

著 者・新 冬二

画 家・瀬戸好子

発行者・相賀徹夫

発行所・株式会社 小学館 (〒一〇一)

東京都千代田区一ツ橋二ノ三三

電話・東京〇三(三三〇)五五四八(編集)

五三三三(業務) 五七三九(販売)

振 替・東京八一〇〇

印刷所・図書印刷株式会社

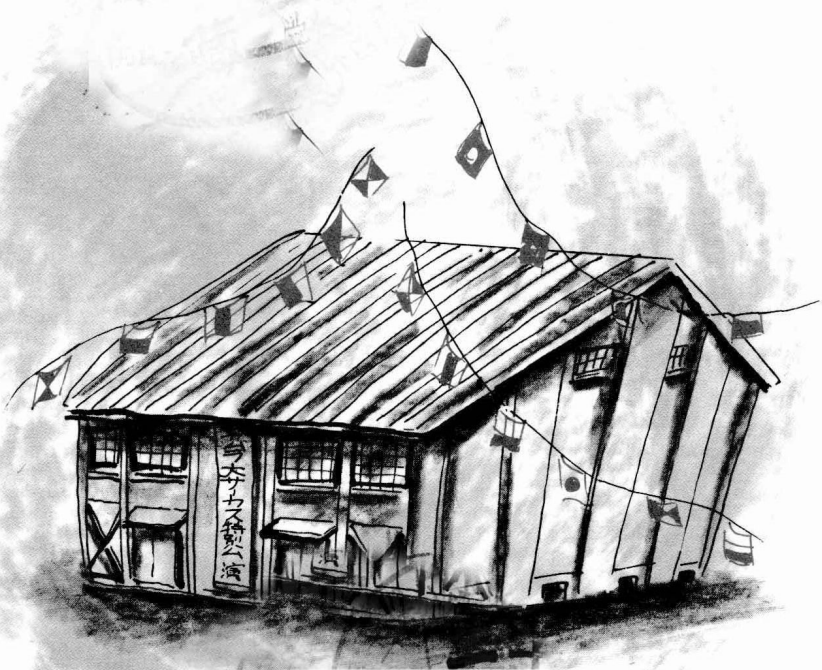
★製本にはじゅうぶん注意してありますが、万一、落丁、あしなどの不良品がございましたら、おたのめさせていただきます。

★本書の内容の一部または全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合は予め小社まで許諾を求めてください。

土曜日のサーカス

新 冬二 作

瀬戸好子 画



土曜日のサーカス／もくじ

5	1
コスモス時計か、なかのこうじさんか	島田 ^{しまだ} くん、いっしょにかえろう
・	・
57	6
3	2
ロッキングチェアにすわると	ビラのなかみがかわった
・	・
32	20
4	1
一〇一五号室 ^{ごうしつ} がなくなった	
・	
45	





6 明^{あきら}くんが、とびだしてきた。 69

7 サーカスは夜^{よる}十二時^じにはじまる。 78

8 アール星^{せい}からのたより。 97

あとがき。 114

装幀デザイン／中野博之



新 冬二（あたらし ふゆじ）

一九二九年、東京に生まれる。現実と非現実とが交錯する独特な心象風景を描く作品が多い。日本児童文学者協会所属。主な作品に、「すてきなすてきなキーン子」「おかあさんの赤いズック」「わたしはねむりひめ」などがある。

現住所／埼玉県所沢市下富ネオボリス一四七

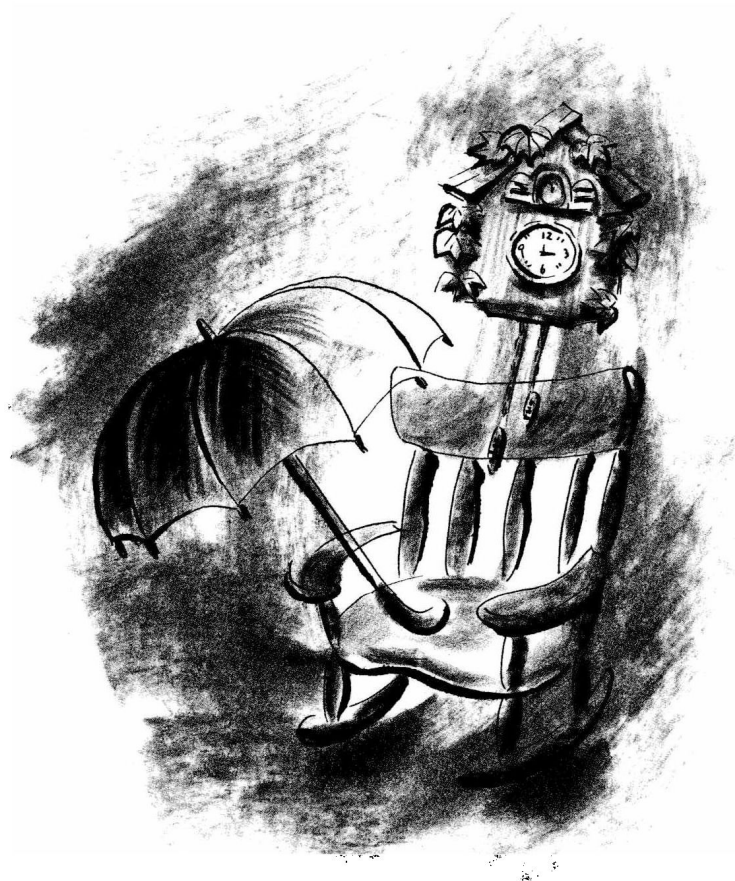
瀬戸好子（せと よしこ）

一九四五年、長野県に生まれる。デザイナーの仕事を経て、童画の世界へ入る。主な作品に「ネコいっちゃった」「ふくろうどけい」「はじめて小鳥がとんだとき」などがある。日本児童出版美術家連盟所属。

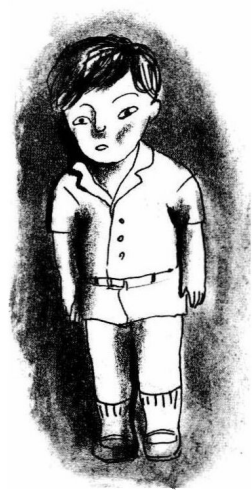
現住所／東京都練馬区高松六一三三―一九

土曜日のサーカス

新 冬二・作 瀬戸好子・画



1 島田くん、いっしょにかえろう



明くんが、キヨシたち三年二組に転校してきたのは、二学期がはじまって、すこしたってからです。

その日は、朝から雨がふっていました。一時間目のはじめに、岡本先生が、明くんをみんなに紹介しました。

「こんど、新しいお友だちになる、中村明くん。東京のまん中の学校から、転校してきました。みんな、なかよしになってね。」

明くんは、ぺこりとあたまを下げました。

うすいブルーのシャツに、同じ色の半ズボンをはいた明くんを見ながら、
（かっこいいな）と、キヨシは思いました。ただ、明くんは、クラスの中では
ちびのほうのキヨシとくらべても、まだ背がひくそうでした。

（もうちょっと背が高いと、女の子にもてそうだ）

キヨシは、ちらつとそんなことも考えました。

明くんの席は、キヨシからすこしはなれた、窓ぎわの、一ばん前にきまりま
した。岡本先生にいわれて、自分の席にあるいていく明くんが、左足をすこし
ひきずっていくのに、キヨシは気がつきました。

（どうしたのかなあ）と、キヨシは思いました。

「きょうは、一日雨ふりでうっとうしいけど、がんばって、やりましょう。」

岡本先生は、明くんのほうを向いてそういうと、一時間目の国語の授業をは

じめました。

キヨシが見ると、席についた明くんは、雨のふっている窓の外をつまらなそうにながめていました。先生のことばを、きいているのかいないのか、窓の外ばかりながめていました。

「島田くん、だめよ、よそ見しちゃ。」

となりから、そつと、よう子ちゃんにいわれて、キヨシはあわててまっすぐ前を向きました。窓の外ばかりながめている明くんが気になって、キヨシは、明くんのほうばかり見ていたのです。

二時間目も、三時間目もそうでした。

（あいつ、どうして外ばかり見てるんだらう）

キヨシは、できたら明くんに、そのことをきいてみたいと思いました。でもキヨシは、はじめての子に、自分からしゃべるのは、にが手でした。休み時間



に、みんなが明くんをかこんでいるのを、そつとのぞいただけでした。

山本くんが、明くんにききました。

「東京のまん中って、どこからきたのさ？」

明くんは、にこつとわらったただけでした。

「きょうだいは、いるのかい？」と、上野くんがききました。明くんは、やっぱり、にこつとわらったただけでした。明くんがわらってばかりいるだけなので、

ことばがしゃべれないのかと思っただけです。でも、それはちがいました。

よう子ちゃんが、「きみのうち、どこ？」ときいたとき、明くんが答えたからです。

「スター・マンション」と、明くんはいいました。

『スター・マンション』というのは、キヨシもしています。学校から十分ぐらい、市営住宅のキヨシの家までの、ちょうどまん中ぐらいのところに、あず

まずいというおすし屋があつて、道はそこで二またになっていました。そこから、ことしの春にできあがつた、レンガ色の背の高いマンションが見えました。それが『スター・マンション』でした。

おかあさんが、おとうさんに話しているのを、キヨシはきいたことがあります。

「『スター・マンション』でも、買う？」

おとうさんは答えました。

「やっぱり、ちよつとでも庭のあるほうがいいなあ。」

印刷会社につとめているおとうさんは、休みの日というと、平屋建の古ぼけた市営住宅のちいさい庭で、植木鉢をならべてすきなさつきの手入れをしていました。近くの病院へ事務のパートにいつているおかあさんは、早く自分たちの家を買いたいと、よくいつています。

かつこいい『スター・マンション』は、かつこいい明くんあきらにふさわしいように、キヨシは思いましたおも。

明くんあきらはいつも、しずかにわらっているだけでした。そんな明くんあきらがおもしろくないのか、クラスのみんなも、明くんあきらのことをかまわなくなっていききました。女の子おんなこの中なかにも、明くんあきらに関心かんしんのある子こは、あんがいなさそうでした。

班はんもべつで、キヨシもやっぱり、自分じぶんから明くんあきらに話はなしかけることはしませんでした。ただ、ときどき明くんあきらはと思おもって見みると、明くんあきらはやっぱりいつも、窓まどの外そとをながめていました。

(あいつ、また外そとを見みてる)

キヨシは、それだけはふしぎでした。

明くんあきらが転校てんこうしてきてから、十日とおかたった日ひでした。その日ひは、四時間目じかんめのと

ちゅうから、雨^{あめ}がふりだしました。キヨシは、あいにく傘^{かさ}をもつてきていましてした。パートにいつているおかあさんが、傘^{かさ}をとどけてくれる、というわけにはいきません。

校舎^{こうしゃ}の出口^{でぐち}のところで、ぐずぐずしていました。みんな、どんどん帰^{かえ}ってきます。

「なにしてるのよ、島田^{しまだ}くん。」

だれかが背^せ中^{なか}をたたいたので見^みると、よう子^こちゃんが、かよちゃんと連^つれだつて、走^{はし}つていつてしまいました。ふいに、あたりがひっそりして、キヨシは、自分^{じぶん}ひとりだけとりのこされたことに気^きがつかしました。

そのとき、

「島田^{しまだ}くん、いっしょに帰^{かえ}ろう。」

明^{あきら}くんがきて、いったのです。明^{あきら}くんは、キヨシがひとりになるのを、まっ

ていたようにでてくると、そうだったのでした。それは、キヨシはかならずつ
いてくると思^{おも}っているいいかたでした。キヨシはどうしようか考^{かん}えながら、そ
れでも明^{あきら}くんのあとから、校舎^{こうしゃ}をでました。

明^{あきら}くんは、持^もっていたブルーの傘^{かさ}をさすと、いいました。

「いっしょに、はいてよ。」

ブルーの傘^{かさ}は、おとなのつかう、大^{おお}きい傘^{かさ}でした。

「やあ、大^{おお}きい傘^{かさ}だなあ。」

キヨシがいうと、

「だって、ぬれるようじゃ、傘^{かさ}のやくめをしないじゃない。」

それから、明^{あきら}くんはいいました。

「ほく、雨^{あめ}はきらいなんだ。」

転校^{てんこう}してきた日^ひにきていたときと同じ、うすいブルーのシャツと半ズボン^{はんずぼん}を